

## 略 歴

1929年7月20日東京世田谷生。学習院初・中・高等科文科甲類(旧制)1950年3月卒。1953年3月東京大学文学部心理学科(旧制)卒,同年東京大学大学院心理学専攻(旧制)入学。1956年北海道大学文学部心理学研究室に助手(実験心理学第1講座)として奉職。同文学部講師(教養部担当)を経て1963年文学部助教授(実験心理学第2講座),大学院兼担。北海道庁・北海道警察本部より青少年中央科学館設立調査・安全運転に関する委員会委員を委嘱さる。1975年「行動論的選択方略分析の基礎的研究」により東京大学より文学博士の学位(学位記番号3533)を授与さる。戸田正直教授らと文学部に7講座から成る本邦最初の行動科学科の設立に尽力(1977年認可新設)。1977年北海道大学文学部教授(実験心理学第2講座-比較行動学講座)。文学部予算委員,学生部委員,大型計算センター・情報処理教育センター・実験動物センター各運営委員,北海道大学大学院委員会委員,北海道大学入学試験本部副本部長,文学部行動科学科会議議長など,学内・学部内運營業務にも参加。1993年3月定年退官,北海道大学より名誉教授の称号を授与さる。1993年4月以降,駒澤大学文学部教授。同大学大学院心理学専攻主任,大学院自己点検委員会全学副委員長など学内運營業務にも従事。2000年3月駒澤大学定年退職。専攻領域は思考心理学・行動基礎論・心理学的ゲーム論。この間,オランダ・フローニンゲン大学,米国カリフォルニア大学(UCSB)に文部省在外研究員,フルブライト上級研究員,駒澤大学在外研究員として滞在,また,韓国ソウル大学・嶺南大学,中国科学院,ロシア・モスクワ国立大学,台湾精華大学,香港バプティスト大学,米国デラウエア大学・カリフォルニア大学(UCSB)に招聘教授・訪問教授として講演や研究に従事。名古屋大学(院)・東北大学(院)・新潟大学(院)・大阪市立大学(院)・筑波大学(院)・関西学院大学(院)・京都大学(院)・豊橋科学技術大学(院)・北海道大学教育学部(院)・放送大学・岩手大学・山形大学・北海道教育大学(札幌・旭川)・札幌医科大学・北海学園大学・北星学園大学・北海道工業大学・藤女子大学・北海道自動車短期大学などの非常勤講師。東京大学・同志社大学・中京大学などで招待講演。現在,日本心理学会,日本基礎心理学会,日本ゲーミング&シミュレーション学会(JASAG),日本認知科学会,日本社会心理学会,北海道心理学会各会員。理事(日心・JASAG),設立準備委員(認科),常任運営委員(基礎心),会長(道心)その他,各学会・学術誌編集委員など長年に亘って諸学会運營業務にも従事。第21回国際心理学会(パリ)・第9回SPADM(フローニンゲン)等国際学会3回出席。1991年日本心理学会認定心理士(認定証番号206号)。著書(単著):「事態構造論序説——心理学におけるひとつの視座」(東京:福村出版,1989),「対人社会動機検出法——IF-THEN法の原理と応用」(京都:北大路書房,2000),その他,上記領域に関する研究論文・評論・解説・分担執筆など数十篇。現在,東京都世田谷区北沢在住。

## 業 績

(年代順記載:ただし学会大会発表論文,各種機関紙寄稿文,各種辞典類用語解説,随筆類,講演要旨等は省略。無表記はすべて単著。\*印は共著・分担執筆・連名などで第1著者でないものを示す)

- 1) 測定指標としての社会性偏差値の検討およびその適用. 教育心理学研究, 1958, 5, 226-233.
- 2) アナグラムの解読に及ぼす材料語と文字配列の影響. 心理学研究, 1959, 30, 253-263.
- 3) 問題解決に影響を及ぼす二三の先行条件. 心理学研究, 1961, 31, 327-336. (長尾桂子・長谷部とし子と連名)
- 4) Some serial properties of subjective randomness. *Japanese Psychological Research*, 1963, 5, 120-128.
- 5) 概念学習. 相良守次編「現代心理学における諸学説」, 岩波書店, 1964, 114-125. (東洋・坂元昂と分担執筆)\*
- 6) 予想反応を規定している諸条件. 「結城錦一先生還暦記念論文集」, 結城先生記念論文集刊行会, 93-101, 1965. (鳥居征彦と連名)
- 7) 概念形成における選択方略について——行動論的選択方略論序説. 心理学評論, 1965, 9, 16-43.

- 8) 概念形成における選択方略について——行動論的選択方略論による実験的検討. 北海道大学人文科学論集, 1965, 4, 1-25.
- 9) 数学的心理学概観. 心理学研究, 1965, 36, 76-93. (戸田正直と共著)\*
- 10) A behavioristic analysis of selection strategies in concept formation. *Hokkaido Report of Psychology*, No. 8, 1966, 1-22.
- 11) 概念学習. 梅岡義貴・大山正編「学習心理学」, 誠信書房, 1966, 336-375.
- 12) 性格検査の統計的方法. MPI 研究会編「新性格検査法」. 誠信書房, 1969, 55-114. (大山正・千葉良雄・竹川忠男と分担執筆)
- 13) 思考とはなにか——心理学的側面から. 山内恭彦・梅岡義貴・坂本百大編「思考とはなにか」, ダイヤモンド社, 1970, 131-192. (高田洋一郎・今井四郎と分担執筆)
- 14) 問題解決に対する行動論的選択方略分析の適用. 北海道大学文学部紀要, 1971, 19, No. 2, 65-98.
- 15) 問題解決における選択方略の実験的分析. 心理学研究, 1971, 42, 24-39.
- 16) 概念学習における選択方略分析のための事例の確率的構造——結合概念課題の場合. 心理学評論, 1971, 13, 229-243.
- 17) 概念学習における次元間相関に関する実験的研究. 高木貞二編「現代心理学の課題」, 東京大学出版会, 1971, 205-217.
- 18) 「囚人のジレンマ」のシミュレーション研究. 高木貞二編「現代心理学と数量化」, 東京大学出版会, 1971, 179-195. (梅岡義貴・竹川忠男と共同執筆)\*
- 19) 予想と決定. 大山正・詫摩武俊・金城辰夫編「心理学を学ぶ」. 有斐閣, 1971.
- 20) 包摂関係を含む概念の学習事態の構造——対提示法による符号系の分析. 心理学評論, 1973, 16, 151-173.
- 21) 思考. 大山正・詫摩武俊編「心理学通論」, 新曜社, 1973, 104-118.
- 22) 思考研究法. 八木旻・続有恒監修「心理学研究法体系」(大山正・芋阪良二編: 実験III) 東京大学出版会, 1973, 1-42.
- 23) 課題解決. 永野重文・依田明編「教育心理学入門」. 新曜社, 1976, 124-147.
- 24) 学習の数理的アプローチ. 金城辰夫・斎賀久敬編「心理学IV学習」, 有斐閣, 1976, 213-238.
- 25) 概念の概念. 東洋・坂元昂編「学習心理学」, 新曜社, 1976, 212-231.
- 26) 概念学習における偽情報フィードバックの問題. 心理学評論, 1977, 20, 122-139. (岡本洋子と連名)
- 27) 対称 3 人非零和行列ゲームの基本構造. *Hokkaido Behavioral Science Report, Series P (supplement)*, No. 6, 1978, 1-13.
- 28) 対称 3 人非零和行列ゲームにおける結託の問題. *Hokkaido Behavioral Science Report, Series P (supplement)*, No. 7, 1978, 1-23.
- 29) Effects of coalition in the symmetric three-person non-zero sum matrix game. *Tohoku Psychological Folia*, 1978, 37, 131-144.
- 30) 対称 3 人関係について——行列ゲームによる考察. 数理科学, 1978 May, 179, 28-34.
- 31) 言語情報処理システムの認知論的モデル化. 昭和 55 年度文部省科学研究費補助金 (一般研究 B) 研究成果報告書 (課題番号 345011), 1978. Pp 42.
- 32) 囚人のジレンマ——軌範的要求系モデルに基づく構造. *Hokkaido Behavioral Science Report, Series P (supplement)*, No. 11, 1979, 1-21.
- 33) 全項出現分布について. *Hokkaido Behavioral Science Report, Series P (supplement)*, No. 12, 1979, 1-16. (葛西俊治と共同執筆)
- 34) 2 人非零和ジレンマ・ゲームのグラフ分析 *Hokkaido Behavioral Science Report, Series P (supplement)*, No. 18, 1980, 1-24.
- 35) 対称 2 人非零和ゲームにおける最終選択状態の構造——要求系モデルに基づくグラフ分析. 北海道大学文学部紀要, 1981, 30, No. 1, (通巻 47 号), 125-169.

- 36) 行列ゲーム事態における一般的反応傾向の検出——規範的要求モデルに基づく「IF-THEN 法」の構成. 基礎心理学研究, 1982, 1 巻 1 号, 1-13.
- 37) 「IF-THEN 法」——プログラムと使用法. *Hokkaido Behavioral Science Report*, Series T (supplement), No. 3, 1982, 1-25.
- 38) 事態構造の概念——「事態構造論」への序章. *Hokkaido Behavioral Science Report*, Series P (supplement), No. 31, 1982, 1-20.
- 39) Detection of the general response tendency in the social interaction situation. *Hokkaido Behavioral Science Report*, Series P, No. 13, 1983, 1-21.
- 40) 対称 2 人非零和ゲームの空間的構造——要求系モデルの相互依存理論的考察. *Hokkaido Behavioral Science Report*, Series P (supplement), No. 36, 1984, 1-13.
- 41) 社会動機成分の基礎分布——「IF-THEN 法」に基づく日米比較. *Hokkaido Behavioral Science Report*, Series P (supplement), No. 37, 1984, 1-13.
- 42) 社会性動機の検出——IF-THEN 型に基づく実験的考察. *Hokkaido Behavioral Science Report*, Series P (supplement), No. 39, 1984, 1-24. (目黒明子と連名)
- 43) 行動科学における PROLOG の応用. *Hokkaido Behavioral Science Report*, Series T (supplement), No. 8, 1984, 1-63. (中川正宣と共編)
- 44) 分解型ゲームの構造. 北海道大学文学部紀要, 1984, 27, No. 2 (通巻 53 号), 107-140.
- 45) 社会的交互作用事態における共栄状態への反応誘導性に関する実験心理学的研究. 昭和 61 年度文部省科学研究費補助金 (一般研究 C) 研究成果報告書. (課題番号 60510036), 1984. Pp 35.
- 46) “TIT-FOR-TAT 方略”に関する実験的考察. *Hokkaido Behavioral Science Report*, Series P (supplement), No. 46, 1987, 1-19. (渋谷美佐と連名)
- 47) 合成的分解型ゲームによる「囚人のジレンマ」事態における反応誘導性に関する実験的考察. *Hokkaido Behavioral Science Report*, Series P (supplement), No. 47, 1987, 1-15. (小林しおりと連名)
- 48) 行動科学における数学サブルーチン・パッケージ (PC-9800 シリーズ: PC-FORTRAN 用) *Hokkaido Behavioral Science Report*, Series T (supplement), No. 13, 1987, 1-53. (瀧川哲夫・中川正宣・舟川政美と共編)
- 49) The concept of logical structure in psychological situation. *Hokkaido Behavioral Science Report*, Series P, No. 20, 1987, 1-31.
- 50) 訓練の構造——事態構造論的考察. *Hokkaido Behavioral Science Report*, Series P (supplement), No. 51, 1987, 1-54. (高橋雅治と共著)
- 51) 行動科学における言語 C の応用. *Hokkaido Behavioral Science Report*, Series T (supplement), No. 12, 1988, 1-84. (中川正宣・邑本俊亮と共編)
- 52) 行動科学における言語 C の応用 (II). *Hokkaido Behavioral Science Report*, Series T (supplement), No. 13, 1988, 1-93. (中川正宣・川端康弘と共編)
- 53) 「IF-THEN 法」改訂版 (version 2.0)——社会動機検出法の構成と使用法. *Hokkaido Behavioral Science Report*, Series T (supplement), No. 15, 1989, 1-54.
- 54) ゲーム論の基礎. 心理学評論, 1989, 32, 202-227. (篠塚寛美と共著)
- 55) 事態構造論序説——心理学におけるひとつの視座. 東京: 福村出版, 1989. Pp 551.
- 56) 2 人関係基本ダイアグラム—— $n$ 水準  $2 \times 2$  型対称 2 人非零和行列ゲームの社会動機論的構造. *Hokkaido Behavioral Science Report*, Series P (supplement), No. 54, 1990, 1-33.
- 57) 社会動機の検出——改訂版「IF-THEN 法」(version 2.1) について. 三隅二不二・木下富雄編「社会心理学の展開 II」. ナカニシヤ出版, 1991, 346-381.
- 58) 「IF-THEN 法」研究資料: 韓国人学生の社会動機. *Hokkaido Behavioral Science Report*, Series P (supplement), No. 56, 1991, 1-10. (李光五と連名)

- 59) 動機論を基盤とする社会的交互作用空間の事態構造論的構成. 平成元年度文部省科学研究費補助金 (一般研究 B) 研究成果報告書 (課題番号 63450011), 1991. Pp 88.
- 60) 「IF-THEN 法」研究資料: 北海道社会福祉関係学生の社会動機. *Hokkaido Behavioral Science Report, Series P (supplement), No. 57, 1992, 1-44.*
- 61) 事態構造論に基づく社会相互作用空間の構成. 平成 3 年度文部省科学研究費補助金 (一般研究 B) 研究成果報告書 (課題番号 02451009), 1992. Pp 20.
- 62) 社会動機のベクトル空間表現——「IF-THEN 法」に基く試論. *Hokkaido Behavioral Science Report, Series P (supplement), No. 58, 1992, 1-20.*
- 63) 行動理論における最近の動向 I. *Hokkaido Behavioral Science Report, Series P (supplement), No. 59, 1992, 1-44.* (中川正宣・細田総と共編)
- 64) 「IF-THEN 法」研究資料: アメリカ・オランダ学生の社会動機. *Hokkaido Behavioral Science Report, Series P (supplement), No. 60, 1992, 1-34.*
- 65) The instruction papers for "IF-THEN method: international version". *Hokkaido Behavioral Science Report, Series P, No. 23, 1993, 1-102.*
- 66) 行動理論における最近の動向 II. *Hokkaido Behavioral Science Report, Series P (supplement), No. 59, 1993, 1-82.* (中川正宣・細田総と共編)
- 67) IF-THEN method: international version. *Komazawa Report of Psychology, No. 1, 1994, 1-21.*
- 68) ゲーム論を基礎とする社会動機検出の国際比較研究検査法の構成. 平成 5 年度文部省科学研究費補助金 (一般研究 B) 研究成果報告書 (課題番号 04451016), 1994. Pp 167.
- 69) 「IF-THEN 法」研究資料: 台湾学生の社会動機. *Komazawa Report of Psychology, No. 2, 1995, 1-32.* (陳省仁と共著)
- 70) 瞑想に関する心理学的研究. 駒澤社会学研究, 1995, 27, 39-51. (篠原英寿・中村昭之・小野浩一・谷口泰富・茅原正・軽部幸浩と共著)\*
- 71) 「IF-THEN 法」研究資料: 中国学生の社会動機. *Komazawa Report of Psychology, No. 3, 1995, 1-44.* (李文馥と共著)
- 72) 「IF-THEN 法」研究資料: ロシア学生の社会動機. *Komazawa Report of Psychology, No. 4, 1995, 1-44.* (葛西俊治と共著)
- 73) 心理学論文における英語表現用例集. *Komazawa Report of Psychology, No. 5, 1995, 1-44.* (監修)
- 74) 社会動機検出のための心理検査技法としての国際登録版「IF-THEN 法」の構成. 平成 7 年度文部省科学研究費補助金 (一般研究 C) 研究成果報告書 (課題番号 06610134), 1996. Pp 238.
- 75) 実社会における潜在的な社会動機の検出を目的とした実用的心理検査技法の試験的構成. 平成 8 年度文部省科学研究費補助金 (基盤研究 B (2)) 研究成果報告書 (課題番号 07551010), 1997. Pp 34.
- 76) 2×2 型非零和行列ゲームにおける最終選択状態——動機強度モデルに基く予測. 駒澤大学心理学論集, 第 1 号, 1999, 47-62.
- 77) 対人社会動機検出法——「IF-THEN 法」の原理と応用. 京都: 北大路書房, 2000. Pp 224.
- 78) 「IF-THEN 法」分析プログラム (version 3.0). *Komazawa Report of Psychology, No. 6, 2000, 1-59.*
- 79) 非対称 2 人非零和行列ゲームの基本構造——事態構造論的散策. 駒澤大学心理学論集, 第 2 号, 2000. (印刷中)
- 80) 協調性に対する文献的基盤. 駒澤大学心理学論集, 第 2 号, 2000, (印刷中). (笹島香織と共著)\*
- 81) 協力ゲームの解への心理学的アプローチの試み——Shapley 値を中心として. 駒澤大学心理学論集, 第 2 号, 2000, (印刷中). (堀内正彦・加藤義和と共著)\*